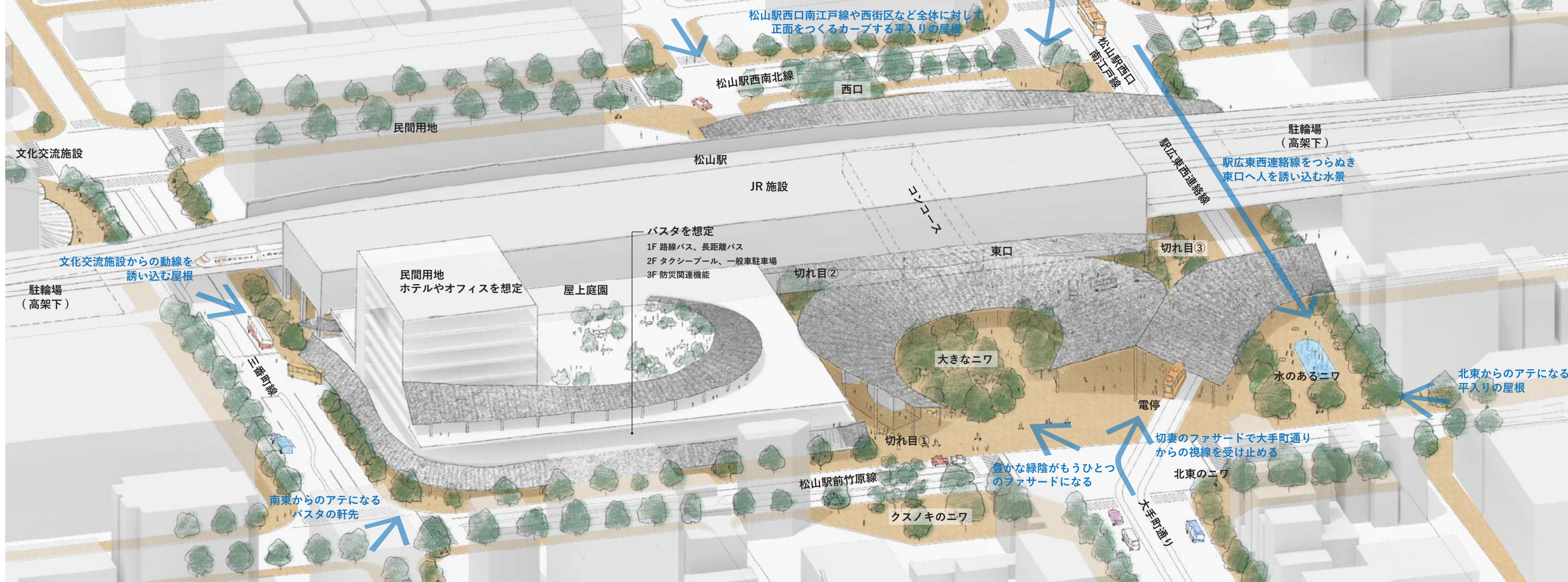


不確定の時代における交通結節点の新しい姿を追求する

現代はあらゆるものが変化し、不確実性、複雑性、曖昧さが増す<VUCA（Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）>と言われる時代に置かれています。特にモビリティは電動化、自動化の技術的な革新が続くことが多いと予想され、交通結節点である松山駅周辺も、新しいモビリティの存在感が増していくなどの変化が予想されます。また将来的に新幹線駅となることも期待されています。新しい松山駅周辺は、今後の変化に対して柔軟に変化しうる可変性をもつ、不確定の時代における交通結節点の新しい姿を追求すべきだと考えます。

歩行者のための都市作りのシンボルとしての駅前広場

松山市は20年以上の月日をかけて「歩行者のための都市作り」を進め、車から人へと道路空間を再配分しながら市民同士の交流を促し、「幸せ」を感じる都市作りを牽引してきました。新しい松山駅周辺はそのシンボルとして、滞留空間を多くふくむ公園のような場所となることを提案します。

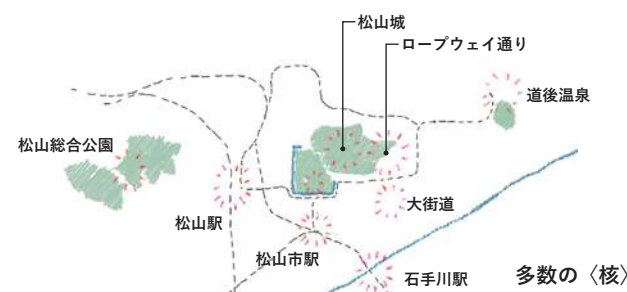


おおらかな屋根でつないでいく、これからの松山駅前広場などのあり方

多様な可能性にひらかれている松山駅前広場などに対して、おおらかな屋根で様々な要素をつないでいくことを提案します。屋根は周辺建物や木立ちとともに「成長する景」として玄関口の景観の骨格を形作ります。屋根の下には今後のモビリティの変化に対応するフレキシブルな要素を「変化の景」として展開していきます。

②駅前広場・街路のデザインについて

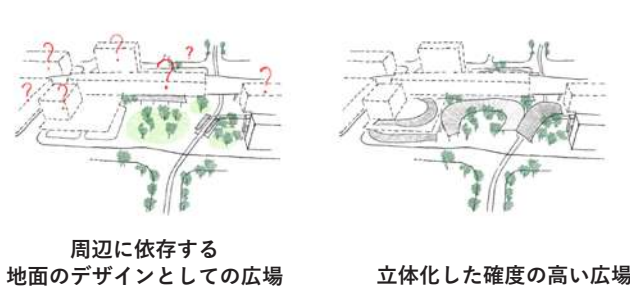
多数の特徴的な「核」で松山市全体を盛り上げる



松山市駅、道後温泉、ロープウェイ通りなど、市内には「核」となる特徴的なエリアが程よい距離を保ちながらリズムカルに散在しています。新しい松山駅は、空間の容量の大きさを生かして子育て支援施設やシェアスペースなど官民の機能を集積し、交通結節点機能と組み合わせることで、もうひとつの「核」としての都市コア機能を創出します。

③その他の任意テーマ

多主体による事業にトータルに統合する建築的提案



通常は周辺の構造物に対する地面のデザインとしてつくる駅前広場空間を立体的なものとし、人の居場所を顕在化します。不確定な要素を含みながら長期間かけて進む駅前周辺地区の整備において、駅前広場に立体的なイメージを先行して立ち上げることで、初期の段階から吸引力のあるエリアをつくり出します。

②駅前広場・街路のデザインについて

やわらかい屋根のカーブで景観をつくっていく



クランクする都市軸をやわらかくカーブする屋根でつなぎながら、屋根の下にゆったりとした移動と滞留の場をつくり出します。屋根はすべての景観軸に対して正面性を感じさせます。また、正面からは「坊っちゃん」の旧制松山中学、初代松山駅のイメージを継承するとんがり屋根の形です。西口はやや低めの平入りの屋根により日常まちなみのスケールにあわせます。

②駅前広場・街路のデザインについて

屋根で東西やまち全体をつないでいく

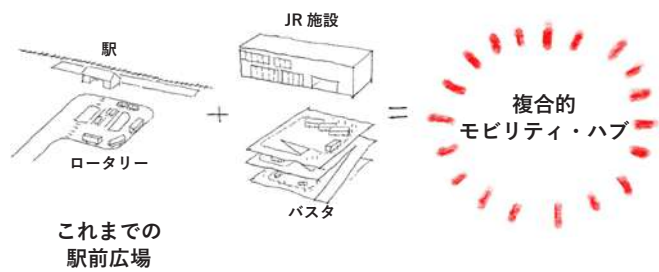


東西を同じ屋根のモチーフで統一感をつくりながら、規模に変化をつけることで、都市的な東口と、日常的な西口の差異をおだやかにつくっていきます。また、周辺で展開していく可能性のある小さなモビリティハブや、延伸する電停、さらに市の交流拠点施設も、屋根というモチーフで統一感をつくりだしていくことを提案します。

企画提案書（プロポーザル方式）説明資料

③その他の任意テーマ

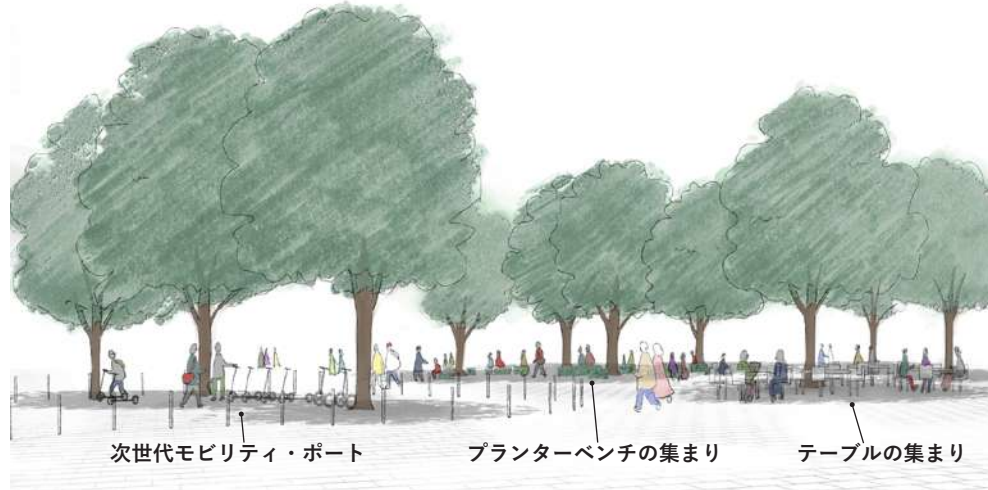
整備の可能性があるバスタを視野に入れたモビリティ・ハブを目指す



松山市ではバスタプロジェクト（以下、バスタ）の候補地として導入可能性が検討されており、将来的にバスタが計画される可能性がある都市です。鉄道駅の「駅前広場」を松山市が目指す「バスタ」やJR施設と一体化し、松山駅を、さまざまな交通手段を集約させた複合的モビリティ・ハブとしていくことを提案します。

②駅前広場・街路のデザインについて

疎密のある木立を中心にモビリティを含めた「小さな集まり」をつくっていく



木を中心にテーブルの集まりや、モビリティ・ポートなど「変化の景」を構成する「小さな集まり」をつくっていきます。木の配列に粗密をつけることで「小さな集まり」に多様性をもたらします。

①デザインガイドライン

②駅前広場・街路のデザインについて

生態系の回廊／植栽について

「成長の景」のランドスケープとして、既存で東西・南北に都市軸を形成する並木をそのまま継承し計画地へ引き込むことで、周辺地域との連続性をつくります。また、広場の外郭を構成する列植は、南西側の既存のクスノキの大木ならびに大手町通りの並木を踏まえてクスノキとします。 「小さな集まり」を形成するプランター植栽は豊かな植生が残る松山城の植物種を基本に構成することで、城山から駅前広場へ生態系ネットワークの拡張を図り、「変化の景」の要素として可動性を担保しつつも、「成長の景」として場所の成熟を図っていきます。また城山の森からタネを採取し育成して植えるワークショップなどで、地域在来の遺伝子をもつ植物を継承します。玄関口として正岡子規の存在を紹介する植栽エリアを設け、子規の生誕地のある花園町通りの子規の庭と連動させながら、まち全体をフィールドミュージアムとして展開させていきます。

③その他の任意テーマ

駅前からモビリティ・ハブへ 多様な機能をもりこんでいく



乗り換え中心の交通結節点 多様なアクティビティのある複合的モビリティ・ハブ

バスタにより立体化して効率よく多様な交通のためのスペースをつくりつつ、待合いや休憩所、カフェなどは緑化された広場と一体となった居心地のよいものとするを提案します。待合や休憩など直接的に交通に関わるものだけではなく、子育て支援施設やシェア・オフィス、小規模物流拠点など、複合的モビリティ・ハブにふさわしい機能をもりこんでいくことを提案します。

